

ふゆ

今年度最後の第3回園内研修会です。テーマは、「こどものひらめきからの探求」です。今日の保育案の中に、その視点が埋め込まれているかどうか、関心をもって参観する。私も、こどもが「ひらめく姿とは」に注目していこうと思う。門の門松に目が留まる。日本の伝統



文化を静やかに伝えているかのようだ。そして、その門から園庭を眺めると、今まで寄せて頂いた春・夏・秋の季節とは打って変わった光景が目に入る。冬支度をした園庭の土、プランターや畑も春の草花や



夏野菜を植えるように土が寝かされている。園庭に並ぶプランターには、イチゴの苗が息づいている。四季折々に園庭が彩を変え移ろいでいる。冬は、樹木もエネルギーをためるようにスッキリしている。見上げるとその姿が美しい。ときには、視線を上に見上げてみると、違う世界が広がり、ときめく。その私の姿に気づき3歳児の保育室から「何しているの」と声をかけてくれるこどもと出会う。「この大きな木 空らに突っ立っていて枝がきれいやなあってみているの」と思いを言葉にすると、顔をこちらに向けて聞いている。おとなの気づき(感性)をこどもと共有する何気ない対話が感性を育てるかなあ…きっと先生たちも無意識の中でかわしておられること

だと思う。

職員室前の軒先には、これから植えられるのであろう春の花たちが待っている。どこが



彼らの住処になるのかと楽しみだ。園庭は、四季を味わえるような自然の営みが富士見には息づいている。そして、そんな庭を置物のウサギが見守っている。どなたかがそっと置かれるのだと思う。ひとり一人の先生方の感性が響き合う。それに興味を持ったこどもがまた遊びウサギが跳ねていく。まるでいのちをもっているかのようだ。春の草花のケース前に緑のボールがあり、ウサギのそばに人

の足跡が残る。そこに誰かが遊んだ痕跡が見える。カメラを向けてときめく私の発見です。

わたしの今日の担当は、3歳児クラスなので、ウサギ組の保育室に入ると、片づけが始まっている。秋に寄せてもらった時からさらに頼もしさを感じる。こども自らが片付けと分か



りせっせと取り組んでいる姿に出会う。それを促すかの環境がある。雑巾がけをする姿にも驚く。使い終わった雑巾を洗って絞ってまでは難しいので、雑巾をかけるラックの横に袋がかけてある。そこに、こどもたちは入れていく。使っていない雑巾は、バーにかけてクリップで止める。日ごろ先生がしておられるのをよく見ているのだと思う。その通りにしていく体の動きがしなやかだ。

片づけが済んで、朝の会が始まる。先生の話椅子に座り聞き始めていく。正面に添付されたウサギのマークがことのほか 2023 年にふさわしいと感じる。これからの遊びや次の約束を言葉とボードを使って知らせていかれる。言葉を聞いて次の予定を頭のなかでイメージしつつ思い描いていくのは、3歳児では難解と感じる。しかし、今までの先生とこどもとの時間がその壁も乗り越えているのだろうか。その中で「ある言葉」に出会った。私がときめいた瞬間です。外遊びが済んで片付けて保育室に戻ってくる時間を「待ち合わせの時間」という言葉を使って約束をしておられたことだ。「待ち合わせ」という言葉は、こどももおとなともに約束をして、その時を共有する言葉だと感じる。そこにこどもをこどもと観ないで一人の人として尊重しているように感じる。私も今度から使いたいと思う。そうして、こどもから遊びのリクエストがあった石鹸クリームも今日はできるということで、出てみると、遊びが始まっていた。そのテラスの後方に見える温室のラック内に、前回の研究会で、「外遊び道具もこどもが取り出せるように」とのアドバイスから今日に繋がっている。先生方のパワーに感動する。リス組さんからは、先生の歌う声が響いてくる。手作り絵のカードをこどもたちに見えるようにリズムに合わせて左右に動かしつつ楽しそうだ。こどもの後ろ姿から関心を持ち(集中して)聴いたり歌ったりしている様子を感じられる。先生の歌う声が澄んでいて美しい。



陽だまりのテラスには、3歳児リス組のこどもが「ハンバーグ屋さん」を自分たちで繰り広げている。手作りレジスターやマックポテトのリアルな箱の取り合わせが面白い。Sさんが、保育室から「はらぺこあおむし」の絵本を取り出してきて、青虫が曜日ごとに食べていくシーンのページを開けて店の横におく。そして、「腹ペコ ハッピーセット」というメニューを考える。「おなかへった!ハッピーセットください」という女の子の注文からひらめいたのか思いついたのか、とてもぴったりのユーモアのある命名に脱帽する。「はらぺこあおむし」は作品展のテーマだと12月のこどもの姿に述べられていることから、3歳児の後半ともなると経験が連続していることが分かる。



冬のビニールシートが敷かれた園庭では、こどもは、なにがしか土肌とは違う振動や動きを感じているであろうが自在に遊びを展開していく。その一方で、リス組の二人の男の子が、地面に掘られた穴に水が溜まっている場所で、何やら頭を寄せ合っている。その足元には、土の塊が並んでいる。近づいてその遊びに耳を傾けてみる。堅い塊を見つけると「これどう?」と、相手のこどもに聞いて、その子が「そうだね」と思うと頷いて、手に取り眺めては置いていく。さっきの塊の列は、こうして集められたものだとわかる。この塊は、「化石」だという。化石発掘調査を二人でしているようだ。手を使い掘り出し手で触り、その感覚で「化石」とひらめく、自分の感覚と一緒に発掘する友達に「どう」と、確かめを仰ぎ「化石」というイメージを共有していく。真剣そのものである。いいなあと感じる。これが3歳児の探究する姿かも・・・この遊びは、おもいつきではないと感じる。ここに並んでいる塊を写真に撮って「化石の標本図鑑」を創れるかも…です。こどもの一つ一つの遊びに物語があるなあ…と思っています。

あらたな春を迎える前に

板橋富士見幼稚園の一年を、四季を通してセンター長のわたしが、感じるままに思いを言葉にして園内の先生方と共有してきました。私の住まいが京都であることの『距離間』が、ほどよい『きもち感』になっているように思います。都会の中の決して広くはない園庭に、程よく遊具と植物と生き物が人と暮らす空間を生んでいます。ここには、今までに培ってこられた皆さんの財産が詰まっています。さあ 来年も新しいこどもや先生方も巻き込んでこの園庭や園舎が輝く時を見つめて感じて、気づきを言葉にして皆さんと共有してみたいと思います。

(文責 鍋島恵美)